雨宮弥太郎　硯展

＊

会期／平成20年1月15日(火)―21日(月)

会場／日本橋三越本店本館6階美術サロン

〈最終日は午後4時30分閉場〉

＊

河辺の声

硯の黒い原石は水中で堆積圧縮されたきわめて濃密度の組織からなる。それゆえか彫刻の鑿が加えられた硯面に水が湛えられ墨が磨られる時、なお河床でのゆるやかな熟成が続いているかのような気さえする。愛硯家の座右で太古の眠りが延長されるのである。硯は特異な器物といわざるをえない。

通常、工芸作品の器は手取りの軽さをめざすのではないだろうか。うつわとは本来的に内部にうつろを抱え込む器物であり、その空洞や隙間はかつてそこに霊がやどっていたことの、祭器としての遠い記憶があるからだろう。ところで淵源が中国の文人趣味に求められる硯は明らかにそれと血脈を異にし、したがってうつわであってうつわではない。弥太郎さんが「精神の器」と呼ぶ如くである。

中世の書院飾りで中心的な場所に置かれていた硯はいつのまにか美麗な容器におさめられ、筆、墨、水滴、刀子と同列のコンポーネントと化した。思えば日本の硯箱ほど祝祭性の強い器物はなく、中華の鉱物の霊気はこの独自な祭器に封じ込められたまま、違い棚に文字通り棚上げされて数百年を経ることとなった。

明治期以降、いわば筐底で塵に埋もれていた日本の硯を救出し、新たな生命を与えたのが雨宮家の先人たちであり、わけても大正から昭和初期、徒な中国硯の追従をやめ、また時の国際的な装飾工芸の流れをも受けいれて清新なデザインを創出したのが弥太郎さんの祖父、静軒であった。自然景に直に取材したみずみずしい意匠は未だに新鮮さを失わない。

今回の弥太郎さんの新作河鹿硯はその中興の祖、静軒翁の作品を本歌として新境地を開こうとするものである。

しかし前近代の箱の封印を解くことは、同時に後戻りできぬ選択でもあったはずである。箱の中から解き放たれるものに正邪の両者があることは、工芸美術にかぎらず西欧起源の近代の受容に伴う必然である。

現代の硯にはその置き所が求められよう。作品のための新たな台座は作家が創造しなければならない。モノの台座への設置は建築の床へ、そして街の外へ、そしてそこに生活する人々へとつながるたしかな接点とならねばならない。その接点がずれれば作品の生命は揺らぐ。簡単なことではないだろう。今おそらく弥太郎さんはその置き所の見当をつけたように思われる。そこは正しく現代の「かざり」となるべき場所である。

弥太郎さんの水月硯が私の机の右手にある。時折の感触の為というよりもむしろそこで重力が作用し続けていることを感じる為に、である。黒い塊は一方で筆をとる人間のこころの行方を正す法器であり、錘であり、鉱脈を手探りするように心中を降りてゆきもする。

冬の夜に硯が発するかすかな響きを聴くことの娯みもあろう。鉱石が河底で結晶する音であり、鰍沢の川面の枯れ葦原をさわがす風の音かもしれぬ。予兆はそこに留まらない。春の水辺のめざめと初夏の蛙の声、岸を洗う漣の音も混じるか。つまりゆっくり循環を始めた何者かの気配が。

小川　稔（美術史）

此の度日本橋三越の厚意により二度目の個展を開催させていただける事となりました。

私が工芸に魅かれるのは、素材の作品に占める力が大きいがゆえに、自己などという小さなものを越えた、より大きなものに近づける可能性を感じるからです。それは一種の祈りのようなものと言えるかもしれません。「精神の器」である硯は私にとって運命的なものなのです。

祖父静軒は自然の風物を硯の意匠へと高めました。近年の芸術観ではそうした自然に対する率直な態度がうすれているような気がします。しかし静軒の作品に私は今直あせることのない新鮮さと深遠を感じるのです。今回は静軒に倣った作品にも取り組んでみました。私の新しい可能性を開いてくれるものと確信しています。

牛歩ではあっても少しでも高みに近づけたでしょうか。ご高覧ご批評願えましたら幸でございます。

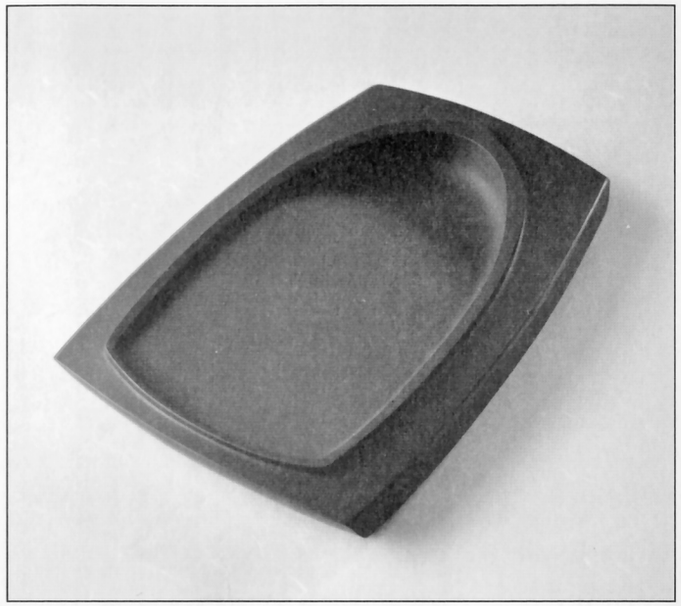
雨宮弥太郎

雨宮弥太郎略歴

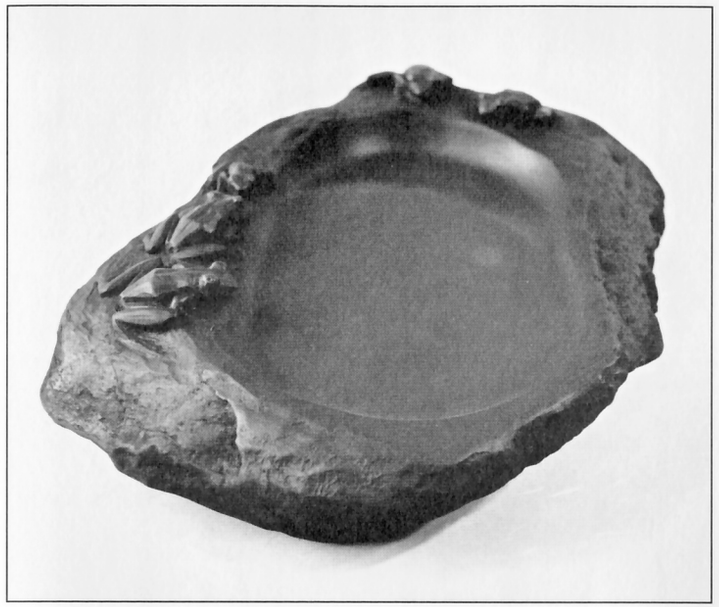
昭和三十六年に生まれる。
平成元年、東京藝術大学大学院修了。
平成二年より日本伝統工芸展に出品。
同十六年、第四十四回日本伝統工芸新作展で東日本支部賞受賞。
同十七年、日本橋三越本展にて個展。
同十八年、第五十三回日本伝統工芸展にて新人賞受賞。
同十九年、第二十七回伝統文化ポーラ賞奨励賞受賞。
彫刻、オブジェなどによる個展も行なう。

住所
山梨県南巨摩郡鰍沢町五四-一

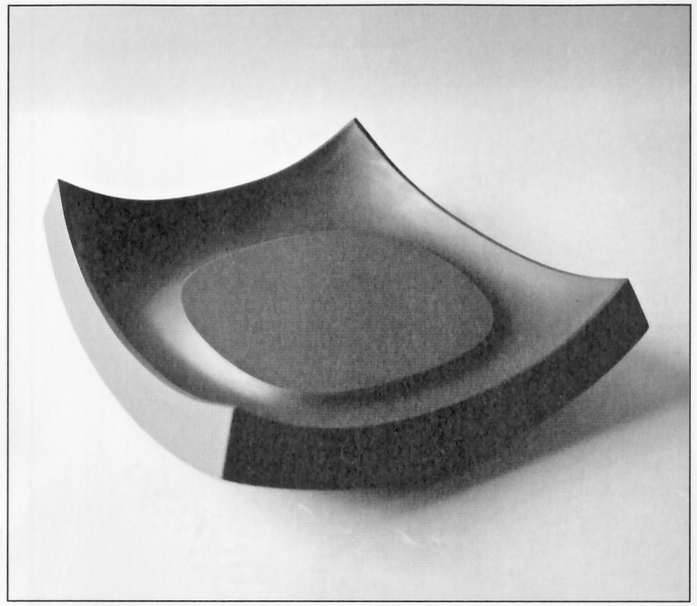
MITSUKOSHI
日本橋本店



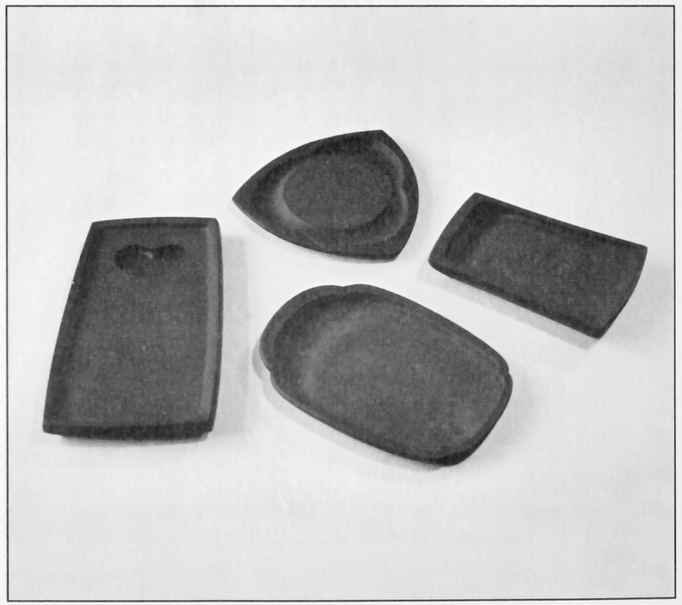
⑥新風硯
24.4×17.1×3.5cm



④河鹿硯
30.0×21.7×7.0cm



①方稜硯
26.0×23.0×7.0cm

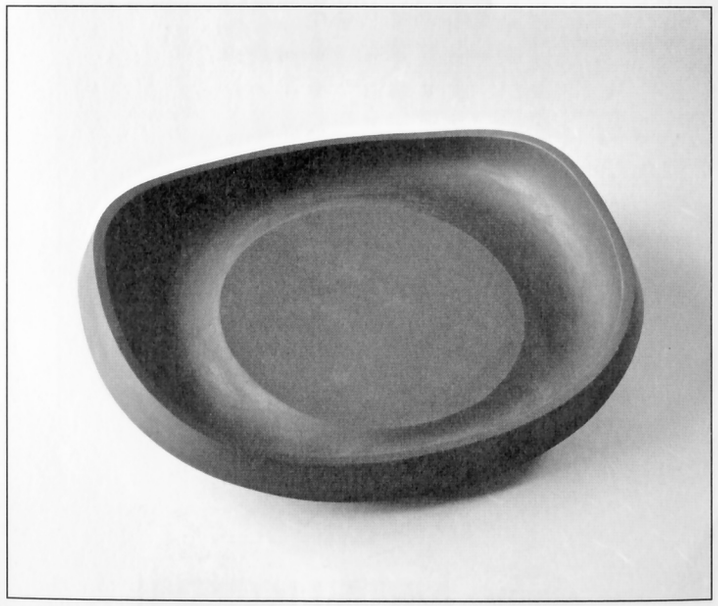


⑩胡蝶硯
16.5×9.6×1.6 cm

⑧三葉硯
12.0×12.0×1.0 cm

⑦風字硯
12.0×7.4×1.8 cm

⑨福葉硯
14.6×9.8×1.2 cm



⑤抱月硯
20.5×25.0×5.5cm

③流紋硯
11.3×8.3×1.4 cm

②流紋硯
13.8×10.6×2.3 cm